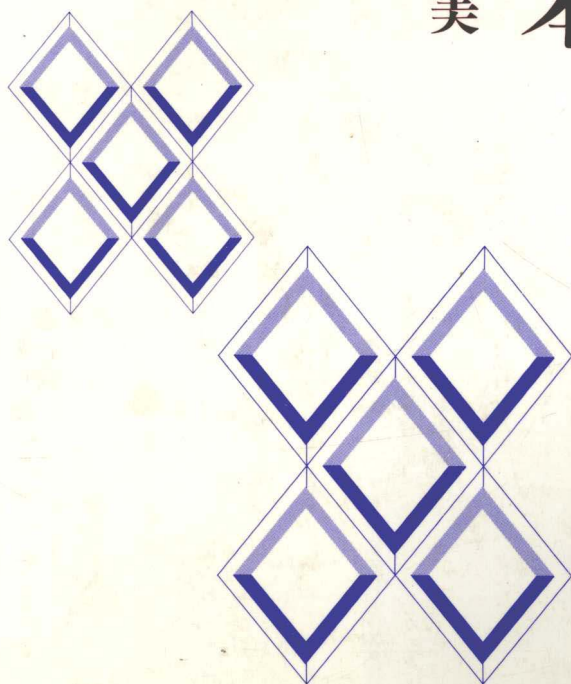


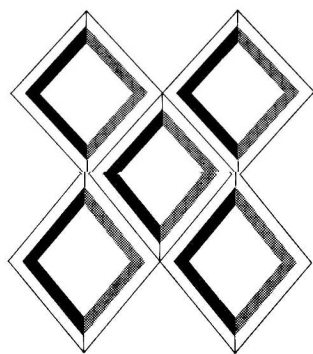
国際経済と日本

島田克美



島田克美

国際経済と日本



学文社刊

著者略歴

しまだかつみ
島田克美

一九二六年生まれ。

一九四七年東京大学法学部卒。

現在 住友商事^(株)理事、兼専修大学経営学

部講師、住友ビジネスコンサルティ
ング^(株)取締役。

著書

島野卓爾編『どう変わる世界貿易と
日本』通商産業調査会(共著)

有澤広巳監修『昭和経済史』日本経
済新聞社(共著)

国際経済と日本

学文社双書 5

昭和五九年十月十五日 第一版第一刷発行

著者 島田克美

◎検印省略

発行所 株式会社 学文社

郵便番号 一五三

東京都目黒区中目黒一―二一六

発行者 北野 登

電話 〇三(七)一五〇一(代)
振替口座 東京 三一九八八四二

乱丁・落丁の場合は本社でお取替します。 印刷所・恵友社印刷
定価はカバー・売上カードに表示。

ISBN4-7620-172-4

凡例

- 一、本書は本文第一部、第二部、第三部及び図表から成り、相互におおむね独立している。とはいえ通読されることにより、理解が深められる形になっている。
- 二、文献の引用は少なくし、巻末に本書のベースとなった文献名を、本文との関連を示さずに、掲載している。
- 三、年号は主に西暦を用い、一九〇〇年代については末尾二ケタの数字だけを示した箇所が多い。
- 四、文中敬称は省略させていただいた。

目次

第一部 国際経済の秩序

第一章 国際経済の理論・政策・制度

1-1	理論と政策の発展	4
-----	----------	---

国際経済を見る眼(4)／国際経済理論の原型(5)／自由貿易政策の形成と崩壊(7)

1-2	現実の国際関係と理論の役割	10
-----	---------------	----

国際経済学の近代理論(10)／国家と国際関係の秩序(11)／平和経済論の系譜(14)

1-3	自由貿易体制の再構築	16
-----	------------	----

自由貿易と通貨の問題(16)／モノをいったアメリカの経済力(18)

第二章 IMF体制とその変容

2-1	IMFの目的と当初のルール	20
-----	---------------	----

IMFの成立と目的(20)／加盟国の義務(21)

2-2	IMF体制の実態	24
-----	----------	----

貿易決済と国際通貨(26)／ドル本位制となったIMF体制(28)

2-3	金・ドル本位制の崩壊	30
-----	------------	----

ドル残高の増大とアメリカ保有金の流出(31)／ドルに対する信認の低下(33)	
2-4 変動相場制への移行	36
新しい為替取極め(37)／金とSDRの地位(38)	

第三章 自由貿易の秩序とその動揺

3-1 自由貿易とガットのルール	41
ガットの原則(42)／経過措置と例外(44)	
3-2 貿易自由化の実績	45
貿易交渉と自由化の進展(45)／残存輸入制限・非関税措置(47)	
3-3 自由貿易体制の動揺	49
貿易自由化と輸入制限(50)／救済措置のルール／セーフガード(52)／アンチ・ダンピング(54)／ガット枠外のグレーゾーン(56)	

第四章 国際経済秩序転換の論理

4-1 アメリカと経済秩序	59
政治経済的アプローチ(59)／パワーという視点(60)	
4-2 ナシヨナリズムの評価	62
国際主義の後退と国益(62)／新重商主義(63)	

4-3	アメリカの政策転換	65
	アメリカの自己認識(65)／ニューリアリズムとただ乗り論(68)	
4-4	多極化と政策的対応	70
	多極化と経済競争(70)／多極化と経済摩擦(73)／多極化と相互依存(74)	
第五章 サミット体制の背景と役割		
5-1	ドルの撒布	77
	アメリカの援助とヨーロッパの再生(77)／軍事援助と経済援助の交錯(79)／援助への積極性と負担の調整(81)	
5-2	先進国グループの形成(OECD)	82
	DACへの道(82)／先進国共通の援助論(84)／OECDの資本自由化ルール(86)	
5-3	資本自由化と企業の多国籍化	88
	自由化ルールと多国籍企業(88)／アメリカの対欧投資(89)／日本の外資政策(90)／多国籍企業と受入国の態度(91)／多国籍企業と投資国の利害(93)／多国籍企業と経済ルールの国際化(95)	
5-4	南北問題への対応	97
	東西関係と南北問題(97)／南北問題処理の論理(99)／OPECの台頭(101)	
5-5	国際経済秩序(NIEO)と先進国の立場	102

新国際経済秩序の要求(102)／南北問題における対立の契機(103)／求められる南北関係再構築(106)	
--	--

第六章 国際通貨金融システムの進展

6-1 赤字国・黒字国の分化	108
基軸通貨を下りたドル(108)／ドルの弱体化と黒字国責任論(109)／ドルの上昇とアメリカの高金利(111)	
6-2 変動相場制の意味	114
当初変動制不採用の背景(114)／変動相場制の利点(116)	
6-3 変動相場制の評価	118
フロート制の機能——理論と実績(118)／為替相場の不安定と為替市場の構造(121)	
6-4 資本取引の拡大と国際金融	123
資本取引拡大の背景(123)／国際資本移動の通貨的側面(124)／資本移動と銀行の市場取引(125)／ユーロ市場の発展(128)／国際金融市場の統合(129)	
6-5 途上国への融資と国際協力	131
国際金融の役割と途上国融資(131)／途上国債務の累積と公的資金の役割(132)	

第七章 貿易・産業構造の変化と国際経済秩序

7-1 管理貿易化の進展	139
--------------	-----

管理貿易の数字的把握(139)／管理貿易の内容(141)

7-2 貿易摩擦と管理貿易	144
---------------	-----

管理貿易化の本質(144)／保護主義の背景(146)

7-3 80年代経済の特徴	147
---------------	-----

80年代の構造問題(147)／政策思想の転換(148)

7-4 産業調整過程への対応	151
----------------	-----

産業調整とプロダクトサイクル(151)／産業政策の国際的調整——PAP(153)

7-5 経済の政治化と国際協力	155
-----------------	-----

経済の政治化(155)／アメリカの政策態度の評価(157)／国際ルールへの日本の対

応(159)

第二部 日本経済の対外バランス

第八章 経常収支と調整問題

8-1 経常収支黒字の意味	162
---------------	-----

国際収支とは(162)／経常収支とアブソープション(166)／経常収支と金融(167)

8-2	国際収支調整の方策	169
	国際収支均衡化メカニズム(169)／調整方法の制限(171)／ポリシー・ミックス(173)	
8-3	国際収支と外貨の過不足	175
	赤字に悩んだ戦後の日本(175)／外貨蓄積は必要か(177)／黒字不均衡と黒字国責任論(179)	
8-4	貿易摩擦への対応	182
	摩擦問題をどうみるか(182)／輸出規制の評価(184)／産業・技術協力の必要性(187)／日本の市場開放(189)	
第九章 経常黒字の要因と日本の貿易パターン		
9-1	日本経済の外需依存と黒字の要因	195
	経済成長における外需依存(195)／黒字要因の分析(199)	
9-2	日本の貿易パターン	201
	黒字問題と貿易パタンの関係(201)／日本の貿易パタンの特徴(202)	
9-3	日本の水平分業促進論	204
	垂直分業と水平分業(204)／加工貿易への反省と水平分業促進論(206)／貿易パターンと政策課題(207)	

第十章 債権国化と資本取引の拡大

10-1	未成熟債権国日本	210
------	----------	-----

経常黒字と債権増加(210)／国際収支の発展段階説(211)

10-2	債権国化の意味するもの	215
------	-------------	-----

債権国化と投資収益(215)／貿易収支と貿易外収支(218)／経常黒字と貯蓄の移転(220)

10-3	日本をめぐる資本移動と金融の自由化	222
------	-------------------	-----

内外資本移動の拡大(222)／国際金融市場と国内金融市場(224)／円の国際化(225)／金融
国際化の要求(228)

第十一章 対外投資・援助大国化の展望と役割

11-1	海外直接投資の拡大とその背景	231
------	----------------	-----

海外直接投資のパターン(231)／従来の海外直接投資の特徴(234)／先発製造業投資の役
割(234)／海外直接投資の新傾向とその意味(235)

11-2	日本企業多国籍化の展望	238
------	-------------	-----

多国籍化の意味と日本企業の態度(238)／多国籍化の諸条件(239)／直接投資大国化の
ビジョン(241)／対外直接投資の日本経済への影響(243)／対内直接投資をめぐる環境
の変化(246)

11-3	わが国経済協力の現状と課題	247
------	---------------	-----

目 次

経済協力の内容と実績(247)／援助の理念と効果(251)／経済協力と日本の地域政策(254)

第三部 　　むすびに

終章 　歴史の教訓と展望

自由貿易主義の帰趨(258)／経済システムのあり方(261)／日本の役割(264)

あとがき 267

文献リスト

索引

表目次

表目次

表 1	貿易収支の変遷	25
表 2	国際流動性の推移	34
表 3	戦後アメリカの経済的地位の変化と国際収支の変遷	67
表 4	先進各国による経済協力と米欧日資本移動	85
表 5	南北問題の推移	104
表 6	各国為替レートと経常収支の推移	112
表 7	途上国の対外債務累積と返済圧力	134
表 8	ブレトンウッズから40年	136
表 9	管理貿易化の進展	143
表 10	国際収支表の仕組み	164
表 11	貿易の特化度・水平分業度	186
表 12	日本の市場開放措置	190
表 13	経常収支と外需の比重	197
表 14	日本の対外資産負債残高	212
表 15	日本のマネーフローと対外資本移動	214
表 16	為替管理の自由化と金融国際化	226
表 17	日本をめぐる直接投資	242
表 18	日本の経済協力	248

国際経済と日本

第一部 国際経済の秩序

第一章 国際経済の理論・政策・制度

1-1 理論と政策の発展

国際経済を
見る眼

われわれは国際経済に対して、およそ三つの方向から、関心をもつ。第一は、どうすれば外国との取引がうまくできるかということである。貿易取引や外国為替の仕組みを学び、海外での売込みに必要な情報を集めるのはそのためである。学問的な領域としては、商業学的な貿易論や国際マーケティング論がこういうテーマを扱う。第二は、諸外国の経済の実情がどうなっているかということである。こういう知識はいろいろな方面で役に立つが、最近では海外投資のための環境調査、カントリーリスクの把握などのために欠かせない。学問的には世界経済論あるいは各国経済論、さらには経済以外の問題も含めた地域研究などというのがこれを扱う。

そして第三に、いわば狭義の、ないし本来の国際経済論の領域がある。これは国際的な、つまり国境を越えて行われる各種の取引が経済理論的にどのような特徴や問題をもっているかを明らかにすることを主眼としている。その限りでは純粹に知的な関心であって、それ自体は必ずしも実用的な目的をもっていない。しかし、こうした関心に基づいて生まれた理論やこれを応用した分析は、国際経済に関する制度や政策と相互に深く影響し合いながら発展してきた。そして国際経済をめぐる制度や政策についての研究は、各国の政府や国際機関にとって重要であるだけでなく、はじめにみたような実